

何かを探している。私のものだったのが綺麗に消えているから探している。いつの日か思い出す日があればその日は幸せなのかもしれない。だから、捜している。

「無駄な物の存在価値」

いつものように目覚めた朝日の陽射しに私は瞳の中に見つめている人のことを何と呼べばよかったのかわからなかったが、何かを教えてほしいと思った、そのことを考えながら空を見上げる。

綺麗な太陽に一つの希望を添えるのは果たして大丈夫なのかはわからないけど、それでも希望はあったほうが良い。

確かに 信じた者よ

人の在り処 それを知る者よ

いずれにしろ 知ったことは 信じたことは

何物にも変わらぬ

真理だということ

綺麗な世界の果てに在るのは何も残されていないという世界だけの絶望を苦しみの中から産まれたのはきつと気のせいではない。

無駄な物の存在価値は世界のどこかにあるのだということを信じて、今でも探しています。だから私は今日も未来を信じて前へと進んでいく。その道に不可能はないから――。

希望 絶望 灯火

華麗な人生 人の望むこと

いずれ知るであろうことを

その者は信じたのだ。